



裁判員裁判：

「白」と「黒」。
そして「赤」

湊 覚（みなと かく）

○●◎「白」と「黒」、そして「赤」―００

なんの通知？

○「白」―０１

ブー、ブー

玄関のチャイムが鳴った。

「どちら様ですか？」

「警察ですが、玄関を開けていただけますか？」

「分かりました。今、開けます」

なんで、警察が僕のところに來たんだろう、と思いながら玄関のドア・チェーンを外し、鍵を開け、ドアを開いた。

「警察の者です。白石、白石一郎さんですね？」

「そうですが、なんの用でしょうか？」

「青山康夫さん殺害容疑で逮捕します」

と言って、胸ポケットから逮捕状を取り出した。

「ま、待ってくださいよ。青山さんですか？ 僕、そんな人は知りませんけど・・・」

「それは、署でお聴きしますから、支度をして同行してください」

「な、何かの間違いですよ。話せば分かることですから・・・。

わ、分かりました。一緒に行きますから、ちょっと、ちょっとだけ、待っていてください」

なんで僕が、逮捕されなきゃいけないんだ。

殺人容疑だって？ 嘘だろう。警察は、何を調べたって言うんだ！ 青山さんなんて、聞いたこともないのに・・・。

●「黒」―０１

ドンドン、ドンドン

玄関のドアが叩かれた。

「誰だよ、こんなに早く！」

「警察ですが、玄関を開けていただけますか？」

「警察？ 警察がなんの用なんだ！

分かったから、うるさくすんな。近所迷惑だろうが！」

とうとう來ちまったか。ここは、あせっちゃまずい。鍵を外し、ドアを開けた。

「警察の者です。黒木、黒木弘さんですね？」

「そうだが、なんの用なんだ？」

「緑川良蔵さん殺害容疑で逮捕します」

と言って、逮捕状を突きつけてきた。

「ちょ、ちょっと待てよ、その緑川って誰なんだ？

俺は知らねえぞ、そんな奴」

「それは、署で聴きますから、支度をして同行してください」

「まったく、面倒臭せえな。安心しろ、やってねえんだから、逃げやしねえよ。部屋片付けて、着替えて来っから、そこで待ってろや！」

そうか、あのオヤジの名前は緑川って言うんだ。初めて知ったよ。

だがよお、上手(うま)く言い逃れしねえと、無期になりかねねえから、無罪で押し通すっきゃねえな。

◎「赤」―01

ピ〜ン・・・ポ〜ン、ピ〜ン・・・ポ〜ン

ドアホンに向かって、

「隣の紺谷ですが、回覧板、お持ちしましたよ〜っ」と言ってみましたが、返事が返ってこなかったんです。おかしいわねえ、さっき誰かがチャイムを鳴らして、入って行くのを見たのに・・・と思いながら、

ピ〜ン・・・ポ〜ン、ピ〜ン・・・ポ〜ン

「赤峰さん、隣の紺谷で〜す」

ドアノブに手を掛けると、すーうっと開いたんです。

「奥さ〜ん、赤峰さ〜ん、居るんでしょ〜う？　どうかしましたか〜っ？」と声を掛けたんですが、なんの返事もなかつんです。台所で物音がしたような気がして、

「奥さ〜ん。・・・どうかしましたか〜っ？　上がらせてもらいますよ〜っ」と声を掛けながら、台所に向かったんですが、胸は段々と早鐘を打ってきました。そして、

「キャ〜ッ」

○「白」―02

警察署に連れて来られた。警察署に来たのは二度目だ。

一度目も、訳が分からなかった。

もう、十年くらい前になるだろうか。あの時も警察が、なんの前ぶれもなく、やって来て、

「婦女暴行で逮捕する」

と言って来た。まったく身に覚えのない話しだった。

それは、電車の中で、女子高生のお尻を触ろうと思ったことは、一度や二度ではなかったけど、電車の中で痴漢オヤジを何度も見ていたので、僕には出来なかった。

警察に散々攻め立てられたが、運良くアリバイが成立した。

事件が起きたその時間に、コンビニの防犯カメラに僕が映っていた。

偶然だった。

そのコンビニが強盗にあったのは、僕がレイプしたと言う日の夜中だった。警察では、下調べをしていると考え、その日の朝から防犯カメラを見たらしい。

その刑事の一人が、僕を取り調べた人だった。

そして、僕が映っているのを見つけた。

もし、コンビニ強盗がなかったら、僕は犯罪者になっていたかも知れない。

それまで、アリバイなんて考えてもいなかったから、その日の何時頃に、何処にいたかなんて考えてもいなかった。

それから僕は、領収書を取っておくことにしていた。

事件がいつ起きたかは知らないが、今はちゃんと取ってある。だから今回は、自分でアリバイが証明できるだろう。

●「黒」—02

また、警察署に來ちまった。何回目だろう。

小学校の時に万引きやって、ここに来たのが最初だったな。だが、許しを請(こ)い、泣き崩れ、俺は警官を騙(だま)してやった。ちょろいもんだった。俺は、天才だと思ったさ。この演技力で、芸能界に入ろうとしたくれえだ。今回も逃げ切ってやるぜ。

でもよお、証拠を残して來ちまったんだよな。俺の「長サイフ」を。馬鹿だよな、俺。

緑川だっけ、包丁なんか振り廻すから、いけねえんだ。素直(すなお)に金を出しゃあ良いのによ。

．．．．．

殺しちまった後、部屋の中を物色したが、金目の物なんか何もありゃあしなかった。見つけたのは、請求書ばかり。俺は、騙されたと思ったぜ。奴のサイフの中にあった三千円をポケットに突っ込んで、外に飛び出し、駅に急いださ。

駅に着いて、サイフがねえことに気がついた。戻るっきゃねえと思い、引っ返えすと、玄関に娘がいた。緑川の孫娘みてえだった。

娘は何も知らずに、玄関のドアを開けてへえって行った。

すぐに悲鳴が聞えてきやがった。

もう、逃げられねえと思ったが、駅に引っ返えして、電車で飛び乗った。あてがあって乗った訳じゃねえが、最初っから、その場から遠く離れてえだけだった。

でもよお、どうすりゃあ良いんだ！

考えろ！ 考えろ！

あわてるな！ あわてるな！

深呼吸しろ！ 深呼吸！

…そうだ！

俺は、何もやっちゃいねえ！ 何もやっちゃいねえんだ！

だから、無罪だ！ 無実なんだ！

無実の男だったら、どう行動する？！

何もやっちゃいねえ男が、サイフを落っこどしただけだ！

そう、俺は、何処かでサイフを落っこどしたんだ！

サイフを落っこどした人間だったら、どうする？

そ、そうだ、交番だ！ 交番に聞きに行きゃあ良いんだ！

「落としたサイフが届いていないか」って！
じゃあ、どこで落っこどしたことにすりゃあ良いんだ？
また、あの駅に戻るか！
馬鹿！ あんなところに戻ったら、その場で捕まっちゃう。
じゃあ、どこで落とした！
考えろ！ 考えろ！
拾われても交番に届けねえ場所を！
お前だったら、どうする？
俺だったら、どこで拾ってもネコババする！
馬鹿やろう！ 俺の一生がかかってるんだ！
考えろ！ 考えろ！
そうだ！ 繁華街の交番だ！
酔ってサイフを落っこどす奴は多い！
拾ったって、届ける奴なんか少ねえはずだ！
やるっきゃねえ！ サイフを落っこどしちまったんだから…。
丁度、電車に乗ってんだから、そのまま繁華街の交番に行きゃあ良いんだ！

◎「赤」—02

「た、大変なんです」
「落ち着いてください。どうしましたか？」
「お、奥さんが旦那さんを…こ、殺したんです！」
「落ち着いてくださいね。その旦那さんは、本当に亡くなっているのですか？」
まだ、脈があるのではないですか？」
「わ、分かりません。で、でも…動きません」
「分かりました。住所が分かりましたので、救急車とパトカーをそちらに向かわせました。
まず、あなたのお名前を教えてくださいませんか？」
「こ、紺谷、紺谷京子です」
「紺谷さんですね。その電話は、お隣の赤峰さんの電話ですね」
「ど、どうして…？」
「ところで、赤峰さんの奥さんは、今、どうしていますか？」
「ソ、ソファに横になってもらっています。な、なんだか放心したような…」
「もうすぐ警察官が、そちらにうかがいますので、奥さんのそばに居てあげて頂けますか？」
「わ、分かりました。
あっ、い、今、救急車のサイレンが聞こえてきました。
げ、玄関に警察の人が来たみたいです」
「そうですか。もう安心して、警察の人に話しをしてください。
もう大丈夫ですよ？」
「え、ええ、少し落ち着きました」

「それでは失礼します」

と言って、１１０番との会話は終わった。

○「白」―03

「あなたは、青山康夫さんを知らないと言いましたよね？」

「ええ、僕は知りません。会ったこともありませんよ。

信じてください！」

「ところで、あなたは、三日前の夜九時頃にどこにいましたか？」

「三日前と言うと、十一月二日ですよ。

・・・翌日が文化の日で会社が休みだったので、会社が終わって一人で映画を見に行った頃です」

「映画か。映画じゃ、アリバイにならないのだよ」

「でも、本当に映画を見たんですよ。信じてください！」

「映画の半券でも持っていれば、日時が書いてあるのだけど、持っていますか？」

「ええ、持っています。家の食器戸棚の一番右の引き出しに入っているはずですよ。なんでも取って置くようにしていますから。

一年以上前の物は、袋に入れてダンボールに入れてあります。ダンボールは、押入れの中ですよ」

「それは良かった。映画の半券がなければ、映画を見た証拠にならないですからね。そうすると、アリバイが証明できないってことにりますからね。ただし、それが見つかれば、の話ですがね。

すみませんが、誰かに調べさせてください。

ねえ、さっき、青山さんを知らないと言いましたよね？」

「ええ、知りません。誰なんですか？」

「そうだ、あなたの仕事はなんでしたっけ？」

「布団のセールスです」

「契約は取れていますか？」

「いえ、この不況であまり契約が取れなくて・・・。

あっ、でも歩合制の部分もありますが、安いですが基本給がもらえますので、なんとか生活しています」

「そんなことを聞いていませんよ。

ところで、十一月一日は、やっぱりセールスをしていたのですか？」

「ええ、していました」

「セールスは、どうでしたか？」

「その日は、山の手の高級住宅街を会社の車で廻っていました。

ある一軒の家では、もう少しで契約が取れそうになりました。後は、署名、捺印して契約が終わると思った時に、お客さんが来られ、奥さんが玄関のところで、お客さんと話していました。戻ってくると、契約は出来ない、って言うんですよ。理由を聞いたのですが、教えてくれませんでした」

「それで、あなたはどうしましたか？」

「どうしたも、こうしたもありませんよ。いつ契約してくれるか分かりませんが、お客さんを怒らせる訳にはいかないので、すごすごと帰りましたよ」

「それから？」

「それからも、近所を二、三軒廻りましたが、契約できませんでした」

「ところで、契約が取れそうだった時に来たお客さんの顔は見たか？」

「応接間から、ちらっと見えましたが、初老の男の人だったと思います。顔までは覚えていません」

「あなたはさっき、青山さんを知らないと言いましたよね」

「またですか。知りません」

「実は、そのお客さんが青山さんなんですよ、青山さん！」

「ええ?! 知りませんでした。奥さんもお客さんの名前は言っていないませんでしたから…」
何故だか、刑事さんの口調が変わった。

「奥さん、空田さんだよね。空田さんの話しじゃね、青山さんに契約をしない方が良く、と止められたと言っているんですよ。青山さんは、たまたま空田さんのところに用事があって来たら、布団屋さんの車が止まっていたので契約するのか聞かれたそう。青山さんは二年前に、あんたの会社から高級羽毛布団を買ったが、羽毛がすぐに駄目になったんで会社に連絡したら、使い方が悪いからだと言われ、相手にされなかったそう。空田さん、それで契約をやめた、と言っているんだがね」

「だから、なんですか？」

「あんた、立ち聞きしていたんじゃないのか? それで頭に来て、翌日、青山さんを殺しんだろう！」

「じょ、冗談じゃないですよ。いくら、あの老人に止められて、契約が取れなかったからと言って、そんな…」

「その口振りだと、立ち聞きしたな！」

「い、いえ、き、聞いていません！」

「何、あせってんの? あせることはないだろう。聞いたんだね！」

「い、いえ、き、聞いてしまったんです」

「そうですか、そうですか、聞いてしまったんじゃしょうがないですね」

トントン

取調室のドアが叩かれた。

ドアが開き、

「すみません。ちょっと」

「どうした。映画の半券は見つかったか？」

「気にする必要はないよ。ここで話してくれ」

「それが、見つからないのですよ。色々な領収書が、山ほどあったのですが、見つかりませんでした」

「聞きましたか? なんだか、見つからなかったようですね」

「え、映画の半券がなかった？」

「すると、あんた、動機があって、アリバイがないってことだよ」

「そ、そんな馬鹿な。僕は人殺しなんて、していません！」

「後は、物的証拠が揃えば、完璧だ！」

「ぼ、僕は殺していないのに、証拠なんてあるはずないじゃないですか！」

「どうかな？」

こんな時間か。午前中は、ここまでにするか。

でも、自白した方が、すっきりするぞ」

．．．．．

映画の半券が見つからないって？

捨ててしまった？

なんで捨ててしまったんだろう？

すべての領収書を取っているのに…。

そ、そうだ！ 映画が終わって、映画館を出る時、少し前を歩いていた若いカップルが、飴の包みを捨てた！

僕は、知らん顔して通り過ぎようとしたが、でも、ゴミを横目で捕らえた時に、拾ってしまった。そして、ポケットにしまった。

そして、飴の包みを捨てる時に、一緒に捨ててしまったんだろうか？

今まで、腐るほど領収書を取って置いたのに…。

●「黒」—03

「お前は、緑川良蔵さんを知らないと言ったよな！」

「なんべん、同じことを聞くんだよ！ なんで俺が知ってんだよ、そんな名前！ 知らねえって言ってんじゃないか。何度も言わすんじゃないよ！」

「そうか、そうか。それじゃあ、お前、三日前の夕方の九時頃にどこにいた？！」

「三日前？ そんな昔のことなんか、覚えちゃいねえよ！」

「ちゃんと答えろ！ 警察をなめんなよ！ お前、何度、ここにご厄介になっていると思ってんだ！ ちゃんと答えろ！」

「るせえな。分かったよ、分かった。やってもいねえことで、警察が得意な冤罪を食らわされちゃ、やってらんねえからな。三日前？ 今日だろう、昨日だろう…、そうすると、十一月二日だよな…。

ああ思い出したよ。パチンコ屋の新台幣入れ替えで、することねえから映画に行ったよ、映画に。俺一人だけだな」

「アリバイを証明できないってことだな！」

「誰だって、一人で映画ぐらい見るでしょうが。刑事さんだって、一人で映画見ることだってあるでしょう？ あれっ、それとも、刑事さんは、ご両親と一緒にないと映画も見られないって言うんですか？」

「うるせえ！ きいた風なこと言うな！

映画の半券は持ってるのか？」

「誰がそんなもの、後生大事に持っているって言うんですか？」

あっ、刑事さんは、コンビニの領収書を集めるのが趣味なんですか？」

「ううっ。

ざ、残念だったな。残っていれば、アリバイの証拠になっていたのにな」

急に取り調べの刑事の口調が優しくなりやがった。どうなってんだ？

「ところで、緑川さんを知らないと言ったよね？」

「ああ、そんな奴、知らねえよ」

「そうだ、君の仕事はなんだっけ？」

「何もやっちゃいねえよ」

「どうやって、飯、食ってんの？」

「陸送やってる達が、時々仕事を廻してくれたり。あっ、俺、大型免許持ってっから。

それと、大部分はスロット。残念だが、金に困っちゃいねえよ。

そうだ、スロットやんなら、出る台教えてやろうか？」

「そんなことを聞いちゃいないよ。

それに、俺はパチンコ専門なんでね。

ところで、十一月一日は、やっぱりスロット？」

「ああ、そうだよ」

「スロットは、どうだった？」

「その日も開店前に並んで、朝からやってたよ。なかなか当たらねえんで、あっという間に三万円すっちゃった。

ところが大当たりを引いたさ。そっから、バンバン当たりが続いて、あっという間に三万円分を取りけえしたがね。

ひょいっと、隣のオヤジの台を見たら、当たりに入ってるじゃねえか。俺って優しいよね。オヤジに言って、目押ししてやったんだよ。そしたら、そのオヤジ、馬鹿みてえに連チャンしやがんの。逆に俺は、落ち目になっちゃった」

「残念だったな。それで、お前はどうしたんだ？」

「どうしたも、こうしたもねえよ。やってらんねえから、家にけえった。結局、一万円負けちゃったがな」

「それから？」

「コンビニで、ビールとつまみ買ってけえって飲んでたよ」

「ところで、目押ししてやったオヤジさんの顔は見たか？」

「目押ししてやった時に、こっち向いたんで、ちらっと見たよ。初老のオヤジだよ。俺も歳とったら、こうなってんのかと思ったら、悲しくなったね」

「お前はさっき、緑川さんを知らないと言ったよな」

「またかよ。何度、同じこと言わせんだ！ 知らねえよ」

「実は、そのオヤジさんが緑川さんなんだよ、緑川さん！」

「へえ、それが？」

いくらなんでも、隣に座ったオヤジの名前なんか、知る訳ねけじゃねえか？
それとも刑事さんは、電車で隣に座った人のお名前を全部知ってんですか？」
刑事の口調が戻った。

「緑川さんを挟んで反対側に座っていた奥さんの話しじゃなあ、緑川さんと年金や貯金、遺産の話しをしていたら、お前が聞き耳立てて聞いていたって話しだぞ！

そして、そんな時に目押しをしてもらったって。

緑川さんも、長年スロットに通っているから、目押しくらい出来るそうだ。

緑川さんは独り者で小金を貯めていることを、そんな時、お前は知ったな！」

「だから、聞いちゃいねえって言ってんだろうが！」

「お前、聞いていたんだろう？ それで、緑川さんの金を盗みに入った。しかし、緑川さんに見つかって殺した！」

「ざけんなよ！　なんで俺がタンス貯金を盗まなきゃいけねえんだ！」

「おお、銀行に預けてないって、良く知ってるな！」

「た、単なる、か、勘だよ。な、なんで、ろ、老人同士の話しに、聞き耳立てる必要があんだよ！」

「何、焦ってるんだ？　焦ることはないだろうが。聞いたんだな？」

「ば、馬鹿言え、あんなとこで大声で話してりゃあ、聞きたくなくたって聞こえて来るじゃねえか」

「そうか、そうか、聞えてしまったんじゃしょうがないな。

これで、お前には動機があって、アリバイがないってことだ」

「そ、そんな馬鹿な。俺は盗みになんか入っちゃいねえ！」

「後は、物的証拠ってやつが揃えば、完璧だな！」

「お、俺は盗みに入っちゃいねえって言ってるだろうが。証拠なんてあるはずねえよ！」

「どうかな。

まあ、午前中は、ここまでにすっか。

自白した方が、すっきりするぞ。お前も、人の子だろうが」

．．．．．

取調べじゃあ、担当刑事を怒らせようと思ってたぜ。俺もそうだが、怒ると考えがまとまりやしねえ。この刑事も、俺の思う壺にはまっちゃったようだ。

でもよお、自分で『タンス貯金』って言っちゃった。

怒ると、本当に損だぜ。

でもよお、取調室にビデオがねえお陰で、助かるよ。調書じゃ顔が分かんねえからな。

◎「赤」―03

「私が奥さんを見た時、奥さんは包丁を握ってました。包丁からは、血がたれていました」
「ビックリしたでしょう。それで？」

「何はともあれ、奥さんの手から包丁を取り上げました。でも、すごい力で握っていて、なかなか外れなくて・・・」

「そうですね。硬直していたんでしょう」

「なんとか、奥さんに話し掛けながら、包丁を取り上げました。そして、奥さんを、ソファーに座らせ、110番しました」

「旦那さんが亡くなったことを確かめなかったのですか？」

「あ、あなた何言ってるのよ！ そ、そんな恐ろしいこと出来る訳ないじゃない！」

「分かりました。

ところで、誰か、他の人が居るような感じはなかったですか？」

「だ、誰かが居たですって！ う、嘘でしょう」

「すみません。確認のために聞いただけですから」

「お、奥さん一人です！ 放心している奥さんが一人でいました！

・・・ところで、変なことを聞いても良いですか？」

「ええ、なんでしょうか」

「110番した時に、住所も赤峰さんの名前も言っていなかったと思うのですが、警察では、なんで、この家が赤峰さんの家だと分かったのですか？」

「ああ、そのことですか。

それは、家の電話だからですよ。家の電話から110番すれば、すぐに特定できます。

携帯電話の場合には、ちょっと時間が掛かりますが、場所もある程度は限定できるのですよ」

「ええ、そうなんですか。ちょっと恐ろしいですね」

「でも、家から110番する場合は、緊急時だけだと思いますよ」

「それもそうですね」

○「白」―04

午後の取調べが始まった。

「これは、なんだ？」

「長サイフです。あれっ、良く見せてください。

僕のサイフみたいですが・・・」

「これが、あんたの殺した青山さんの家の中に落ちていたんだよ」

「なんで、僕のサイフが？」

「それは、こっちの質問でしょうが」

「知りません。何故、僕のサイフが、そんなところに落ちていたかなんて・・・」

「風に吹かれて飛んできたのかな？」

それとも、サイフがあんたの懷を抜け出して、歩いて来たのかな？」

「わ、分からないって言っているじゃないですか！」

「分からないで済めば、警察はいらないよ！」

「で、でも、ぼ、僕は、知らないんです」

「物的証拠まで揃っちゃったな」

「ほ、本当に、し、知らないんです」

「送検するから、後は裁判で無実を証明するんだな」

．．．．．

嘘だろう。僕は何もやっていない。あの日だって、映画に行っていただけだ。なんで僕が、あの老人を殺さなければいけないんだ。契約が取れなかったことなんて、今までに何十回も何百回もあった。そのたびに、僕は人を殺していたとでも言うのか！

．．．．．

「そうだ。あんた、昔に婦女暴行で捕まったそうだな」

「え、ええ、でも無実でした。アリバイがありました」

「今度も、そうなるかな？ まあ、今度は裁判員裁判だから、前みたいに逃げられないかもな

。

これで、俺の仕事は終りだ。ひょっとすると、あんたの裁判で呼ばれるかも知れないが、俺の気持ちは変わらないと思うよ。

あんたは、殺人犯だ！」

●「黒」—04

午後の取調べが始まった。

「おい、これは、なんだ？」

「長サイフだろうが。それが…、ちょ、ちょっと待てよ。貸せや。

お、俺のサイフじゃねえか」

「これが、お前が殺した緑川さんの家の中に落ちていたんだ！」

「そ、そいつは落っこどしたもんだ！

な、なんで、そいつの家の中にあっただ！」

そいつがネコババしたのか？」

「落とした？」

そうだな、緑川さんの家の中でな！」

「お、俺は、サイフを落っこどして、交番に届けたじゃねえか！」

「おいおいおいおい、警察をなめんじゃねえぞ！ そんな言い訳が通用するとでも思っているのか！」

「そ、そんな物が、殺人の証拠になんのか！」

「当たり前じゃないか！ 殺された緑川さんのそばにお前のサイフが落ちていた！ これ以上の証拠が、どこにあるって言うんだ！」

「ふ、ふざけるな！

俺は、サイフを落っことして交番に届けた！

調べりゃ、分かるじゃねえか！

俺は、殺しちゃいねえ！

俺は、そいつの家に行っちゃいねえ！

誰か、目撃者でもいるって言うんか！

俺は無実だ〜っ！」

「うるせえ。だまれ！

調べてやるから、静かにしろ！

誰か、交番に連絡して、サイフの遺失物の届け出が出ているか調べてやれ！ うるさくて仕方がねえ！」

．．．．．

トントン

「済みません」

「いいぞ、話せ」

「交番に聞いてみたのですが、届け出された中には、なかったそうです」

「残念でした。交番じゃ、そんなものは受理されちゃいないってよ。

どうせ嘘をつくなら、交番なんて馬鹿な場所じゃなく、喫茶店くらいにしとけば良かったのにな。

被疑者否認のままになっちゃったが、裁判で白黒つけろや！ 絶対に黒だがな！」

なんとか、逃げ通せたぜ。後は、裁判でどうなるかだな。

小学校から悪さを重ねてきたから、心証、悪いんだろうな。

でも、あん時に必死で考えて、交番に届けたのに、なんで交番に記録が残ってねえんだ！

そりゃあ、俺が殺したよ。でも、あれとこれとは、話しが別だろうが！

◎「赤」―04

「奥さん、大丈夫ですか？

ああ、そのまま、座ったままで結構ですので、話を聞かせてください」

「……」

頷(うなず)いただけだった。

「貴方がご主人を刺してしまったのですか？」

二度、小さく頷いた。

「どうしました？ 声が出ないのですか？」

「うう……」

「無理しなくて結構です。

こんな時に申し訳ありませんが、少しだけ質問させてください。

今のように頷くか、首を振っていただければ結構ですから」

コクンと頷いた。

刑事さんも頷き、

「それでは、

ご主人以外に、誰かいませんでしたか？」

刑事さんの目を見て、大きく首を横に振った。

「もう一つだけ質問させてください。これが終わったら、病院にお連れします。

貴方の顔には、殴られたような傷がありますが、ご主人に殴られたのですか？」

うなだれながら頷いた。涙がこぼれたようで、そっと中指でぬぐっていた。

警官が来て、

「台所に長サイフが落ちていたのですが……」と言った。

刑事さんが、

「ご主人の物ですか？」

と聞いた。

奥さんは、一瞬、大きな目で長サイフを見つめていたような気がしたが、すぐにうつむき、頷いた。

「ありがとうございました。

まずは、警察病院にお連れしますので、十分に調べてもらってください。多分、ショックで声が出なくなっただけだと思います。

裁判になったら、ちゃんと答えるのですよ」

小さく頷いた。

○●「白」と「黒」―05

なんで、よりによって私なの？

毎回、ジャンボ宝くじを買っているのに当たらない私が、なんで裁判員裁判の裁判員に当たってしまうの？

裁判員になりたくて仕方がない人なんて、山ほどいると思うんだけどなあ？

ああ～あ、本当に一週間で終わるのかしら？

◎「赤」―05

当たった、当たった。これで、家に帰れるぞ。

単身赴任で、ここに来てから半年。今までだったら、毎月、本社で会議があって帰れたのに、それが、いつの間にかパソコンでの会議になってしまった。味気ない画面の前で、一生懸命に話しているのに、誰も聞いていないような寂しさを感じる。

そんな時に、通知が来た。

これで、帰れるぞ～っ。

国から飛行機代が出て、家から裁判所までの交通費も出る。

それに日当も、一万円以内だけでもらえるしな。

なんだか、ちょっとだけ税金を回収した気分だ。

でも、電車やバスは、最も安い経路で計算されるらしい。

タクシーは、足が悪いとか特別な場合には払ってくれるらしいが、僕みたいな健康な人間は絶対に出ないな。

聞いた話じゃ、独身だったら、宿泊費として七千八百円か八千七百円出るらしいけど、僕の住んでいるところは、どっちなんだろう？

それに、一kmで三十七円くれるって、どう言うことだろう？

ちゃんと調べてみないとな。

そんなことより、会社が不景気なのに、ひょっとして、会社に戻ったら、座る席がなかったらどうしよう。

．．．．．

「あなた。何ブツブツ言っているの？ 裁判に遅れちゃうわよ」

「ああ、分かった。行ってくるよ。

折角、帰ってきたのに悪いな」

「お国のためでしょう。行ってらっしゃ～い」

「単細胞は、楽で良いよな」

「ええ？ 何か言った？」

「い、いや、なんでもない。行ってきま～す」

○「白」―06

「それでは、開廷致します。

被告人のお名前は、白川一郎さんで間違えないですね？

住所は・・・

それでは、検察官は起訴状を・・・」

「はい、被告人は・・・」

．．．．．

僕は、何もしていない。

何故、あんなところに僕のサイフが落ちていたのか、まったく分からない。

これで罪になるのなら冤罪だ！

折角、就職できた会社から解雇の通知が届いた！

そんな馬鹿なことがあってたまるか！

婦女暴行の時のように、奇跡は起こってくれるのだろうか？

そ、そんな弱気でどうする！

サイフのことは警察に話した。

余りにも古くなったので、新しい財布を購入し、そして古いサイフを捨てた。

そのサイフは、初恋の人が、アルバイトをして、僕の誕生日に買ってくれた物だった。でも、その後すぐに、あのレイプ事件があって、僕は警察に捕まってしまった。彼女は、僕を信じてくれた。そして、無罪になったが、なんとなく、話しが途絶えがちになり、なんとなく、別れてしまった。

彼女との思い出だが、レイプ事件の思い出すので、使えなくなったら捨てようと思っていたサイフ。

愛着があったので、なかなか捨てられず、胸ポケットに入れていた。

あの日たまたま、あの地区のゴミ収集日だったので、それで、サイフに『さよなら』を言って・・・捨てた。

それが、なんで青山さんの家の中で見つかったというのだろうか？

僕には、・・・僕には分からない。

●「黒」 — 06

「それでは、開廷致します。

被告人のお名前は、黒木弘さんで間違えないですね？

住所は・・・

それでは、検察官は起訴状を・・・」

「はい、被告人は・・・」

その通りだよ。良く調べてやがるぜ。

あん時、サイフさえ落っこどさなきゃ、捕まるはずねえのに。このごにおよんで、悔やんでもしかたがねえか。しらを切り通すっきゃねえ！

でもなんでだよ。俺は、ちゃんと交番に届けたじゃねえか。それがなんで受理されてねえんだ

！

あの刑事が隠したんじゃないだろうな！

それじゃあ、冤罪じゃねえか！

殺していて、冤罪もねえか。

ひょっとして、あれは俺の夢？

そうすると、これも夢？

ざけんじゃんねえ！

夢は夢だ！

これは、現実だ〜っ！

◎「赤」―06

「それでは、開廷致します。

被告人のお名前は、赤嶺さくらさんで間違えないですね？

住所は…

それでは、検察官は起訴状を…」

「はい、被告人は…」

○「白」―07

「それでは、弁護人から…」

国選弁護人が、

「被告人は…」

もっとちゃんと僕の無罪を主張してくださいよ！

僕は無実なんだ！

僕のサイフが、なんで青山さんの家の中にあったんだ！

弁護士さん、お願いだからちゃんと調べてください。それを解決してくれないと、ひょっとして…。

●「黒」―07

「それでは、弁護人から…」

国選弁護人が、

「被告人は…」

国選弁護人なんていい加減な奴らがやると思っていたが、結構、まともにやっているじゃねえか。そうそう、俺は無実なんだからな。

でもよお、なんでサイフを落っこどしたって、交番に届けに行ったのに、残っていねえんだ！
しかしよお、それがみつかれば、ひょっとして…。

◎「赤」―07

「それでは、弁護人から…」

国選弁護人が、

「被告は、ご主人が会社を早退して帰って来て、訳も分からず怒り出し、奥さんを殴りつけました。奥さんは、このままでは殺されるのではないかと思ったそうです。

そして、キッチンに手を掛けて立ち上がろうとした時に、手に包丁が触れました。

ご主人が、近づいて来たので、とっさに包丁を持ってしまい、そのままご主人にぶつかって行っていました。

そして、ご主人は倒れた。

そのショックで、被告人は声が出なくなってしまったのです。

そのため、筆談で取調べを受けました。

これは、正当防衛で・・・、無罪です！」

○●◎「白」と「黒」。そして「赤」―08

あれっ、あの人は…

○「白」―09

こ、このままでは、僕は有罪になってしまう。

どうすれば良いんだ！

僕は、人殺しなんてやっていない！

どう言えば信じてもらえるんだ！

「それでは、被告人の白石さん。何か言っておきたいことはありますか？」

「ぼ、僕は無実です！

それは、青山さんの話を聞いてしまったのは事実です。で、でも、私は、青山さんの家には行っていません！

信じてください！

何故、僕のサイフが青山さんの家の中に落ちていたのか、僕は、まったく分かりません！

僕は、新しいサイフを買ったので、あの古いサイフをゴミ捨て場に捨てたのです！ ゴミ捨て場に！

信じてください！

僕は、青山さんを殺していません！」

僕は、深々と頭を下げた。知らず知らず、涙が流れていた。

●「黒」―09

「それでは、被告人の黒木さん。何か言っておきたいことがありますか？」

さて、ここが正念場だぜ！

有罪か無罪かを賭ける一世一代の芝居をしてやる！

「お、俺、昔から誤解を受けやすくして…。

小学校の時です。友達のお袋さんが病弱で、それに離婚してて、一人っ子だったんです、そいつ。

でも、冬休みのある日、そいつが一人で、スーパーに入るところを見たんです。そしたら、そいつ、菓子パンを上着の中に隠したんです。

お、俺、ビックリして、そいつのところに行って、菓子パンを取り上げたんです。

…そこに警備員が来たんで、その菓子パンを上着に隠しました。そいつは、商品棚の陰に隠れました。

お、俺、そいつを裏切れませんでした。

そのお陰で、交番まで連れて行かれて、こっぴどく怒られました。

それから、同じように何度か警察にご厄介になりました。

俺、俺、人なんか殺してません！

そ、それに、俺、サイフを落として交番に届けたんです。で、でも、警察じゃ、届け出されて
いないって言うです。

俺は、何度も何度も調べ直して欲しいって言ったんです……」

俺は、顔を両手で覆(おお)って泣き声を上げた。

舌を出しながら。

◎「赤」—09

「それでは、被告人の赤峰さん。何か言っておきたいことがありますか？

あっ、失礼しました。そこにある用紙に書いてください」

赤嶺さんは、少し考え、何かを書き出した。

涙を浮かべながら、必死で書いていた。

そして、書き終えた。

「それでは、お手数をお掛けしますが弁護士さん、それを持って来ていただけますか。

それでは、私が読みます。

『私が主人を殺してしまったのは事実です。

調理台の上に包丁がなければ。ちゃんと片付けておけば、と悔やんでいます。

申し訳ありませんでした。

どんな刑でも受けます。

義父(おとうさん)、義母(おかあさん)、申し訳ありません』

これは、私、裁判長の補足ですが、ご主人の両親に対してです。

被告人は、裁判長が読み上げる間、うつむいてハンカチで目頭(めがしら)を押さえていた。

肩は、小さく波を打っていた。

○「白」と「赤」—10

「それでは、ここで休廷し、午後は、一時から始めます！」

●「黒」—10

あれっ。あの左端の女。そうだ、あの女だ。

「それでは、ここで休廷し、午後は、一時から始めます！」

○「白」—11

あの男だ！

十年前、私をレイプしたのに、無罪になった男！

また、罪を犯したんだ！

あの時の屈辱は忘れない！

刑事も、検事も、裁判官も、私がレイプされた状況を根掘り葉掘り聞き出そうとした。刑事も、
検事も、裁判官も男だった。

三人とも、「その時、気持ち良かったですか」と、ニヤけた顔をして聞いて来た。

ふざけるな！

近所の人の私を見る目が違った。蔑(さげす)みの目だった！

けっして、哀(あわ)れの目ではなかった！

耐えられなかった！

自殺も考えた！

でも、出来なかった。

自殺も出来ない私が、情けなかった。その時には、涙なんか枯れ果てていたわ。

両親は、私のために引っ越しをしてくれた。

でも、引っ越してすぐに両親が事故死してしまった。轢逃げだった。

後から、おじいちゃんが話してくれた。

『あの時、引っ越しの費用が大変でな。お前のお父さんが、お母さんに、「もし私が急に死んでも、お前達に苦勞をかけないように、高額生命保険に入っていたが、支払いが大変なので、安いのに切り替えるよ」と言って、先に安い生命保険に入っていれば良かったんだが、先に解約してしまった時の轢逃げ事故だった。だから、保険金も入ってこなかった。お前には苦勞をかけたな。ゴメンよ』と言って、私に謝っていた。

私があの中に、声をかけられても知らん顔していれば……。

今、その男が目の前に居る！

今度は人を殺した！

そうだ！

この男は悪魔だ！

このまま無罪にして、平和な生活を送らせてはいけない！

私のような……。殺されてしまった老人のような……。

そんな悲劇を終わらせなければいけない！

死刑とまではいなくても、無期懲役にしなければ、また、何をするか分からない男だ！

●「黒」 — 1 1

あの男だ！

十年前、私をレイプした男！

私は、誰にも言えなかった。

家に帰り、お風呂に飛び込み、涙と一緒に洗い流し、すべてを忘れようとした。

その男が目の前に殺人犯として現(あらわ)れた。

気がつかないで……。願いだから……。

この人に知られる前に、早く裁判を終わらせたい。有罪でも無罪でも、どちらでも良いわ！

早く終わって……。

◎「赤」 — 1 1

あの人は、隣に住んでいた娘(こ)だ！

私より一つ下だった。

あの時の名前は、たしか……桃井、桃井さくら。

幼稚園も小中学校も、高校も一緒。

僕の初恋の人……。

そう、あんなところを見なければ、俺は彼女にプロポーズしていただろう。

それが今では、夫殺しの被告人……。

○「白」―１２

「すみません。弁護士さんと呼んでいただけますか？」

弁護士が来た。

「僕、思い出したんです。あの映画館で、一つ前に座っていた年の離れた夫婦の奥さんが、急に後ろを向いたんです。

そして、僕と目が合いました。

きっと、あの人が僕を覚えていると思います。そうすれば、僕が映画を見ていたことを証言してくれると思います。

お願いします」

「分かった。分かった。探してみよう。

君は、本当にやっていないのだね？

何故、ゴミ捨て場に捨てたサイフが、青山さんの家の中にあったのか、本当に知らないのだね？」

「ええ、何故、青山さんの家の中にサイフがあったのか、僕には分かりません」

「まさか、それ以上、何かあるってことはないだろうね」

「ある訳ないじゃないですか。私は、あの家に行っていないのに、何があると言うんですか！」

「分かった。君の話を信じて、その夫婦を探してみよう。

その奥さんの特徴は？

うんうん。まるで、水商売の女のようなですね。

それだけの特徴があれば、なんとか調べられるでしょう」

「あ、ありがとうございます。前のレイプ事件でも、僕は無実でした。信じてください。ぼ、僕は無実です！」

「弁護士は、被告人の話を信じるところから始める。

安心してください。探してみましよう」

本当に、調べ出してくれるのだろうか？

●「黒」―１２

「ねえ、悪いけれど、弁護士さんと呼んでくれる？」

弁護士が来た。

「弁護士さん。今日は、ありがとうね」

「それが仕事だからな」

「ところで、友達の前、いや、藤沢健二に伝えて欲しいことがあるんだ。良いかな？」

「どんなことですか？」

「今から言うから、それをそのまま、藤沢に伝えてよ。

『犯人は、自首しそうもないんだ。逃げられると思っているみたいだ。りょうすけに、サガす

ように、言ってくれ。留守だろうがなんだろうが、俺の願いを、どうしても叶えて欲しい。絶対に頼む』

『サガ』すようには、カタカナで頼みますよ。あいつ、その漢字が苦手だから。点とか丸とかは、言った通りに付けてくれましたか？

それじゃあ、藤沢に伝えてよね。

俺が助かる道は、これっじゃないんだよ。頼むぜ」

◎「赤」— 1 2

看守が、

「奥さん、大変だったね。

でも、安心しな。このまま、何もなきゃ、あんたは無罪放免だ。

でもよお、なんで旦那さんが急に帰って来たんだろうな？

旦那が帰って来た時、奥さん、ビックリしたでしょう。

そんなことは、どうでも良いか。

ああ、そうだったな、奥さんは、声が出なかったんだよな。ここで、俺が襲っても…。

そ、そんな目で俺を見るな！

じょ、冗談だよ、冗談じゃねえか！

でもよお、あんた、寝ている時に…」

枕を投げつけられ、看守はスゴスゴと彼女の前から遠ざかった。

○「白」— 1 3

今日の話を聞くと、動機あり、アリバイなし、証拠はサイフだけしかない。

これでは、証拠が少な過ぎるわ！

これじゃあ、あいつが無罪になる可能性があるわ。

なんとかならないの？

あっ、おじいちゃんが見に来ている。

『おじいちゃん、気づいて、この人がレイプ犯よ！ 気づいて！』

●「黒」— 1 3

あっ、こっちを見たような気が…

◎「赤」— 1 3

事件には関係ないのだから、話さなくても良いか。

でも、話した方が良いような…。

いや、このまま黙っていれば、彼女は『正当防衛』で無罪になりそうだ。

でも、何かが違うような…。

○「白」—14

弁護士さんが、あの夫婦を探してくれれば、…アリバイが証明される。
もう少しの辛抱だ。僕は無罪なのだから…。

●「黒」—14

「藤沢さんですか？」

「ああ、そうだが」

「私、黒木さんの弁護人の助手で金井と言います」

「ああ、黒ちゃんの弁護士さんとの」

「ええ、そうです。黒木さんは、無罪を主張しています。弁護人としては、あの人の無罪を信じています。黒木さんから、至急に藤沢さんに伝えて欲しいと言われて来ました。黒木さんは、これで無罪になれるとも言っていました」

「黒ちゃんが？」

「ええ、彼からの言づけが、これです。」

『犯人は、自首しそうもないんだ。逃げられると思っているみたいだ。りょうすけに、サガすように、言ってくれ。留守だろうがなんだろうが、俺の願いを、どうしても叶えて欲しい。絶対に頼む』と。

ところで、『りょうすけ』さんを知っていますか？」

「えっ、りょうすけ？」

あ、ああ知っているよ。知っていますとも、良〜くね。

これから、すぐに『りょうすけ』のところに行って来るよ。『りょうすけ』に会いにね。

黒ちゃんが無罪になるよう、俺も頑張るから、しっかり弁護の助手を頼むぜ！

黒ちゃんに、メッセージはしっかりと受け取った、と伝えてくれ」

「弁護人は、依頼人に言われたことを忠実に行うだけです。それを助けるのが助手です。結果までは保証できませんが、頑張ります。」

黒木さんには、藤沢さんが、『しっかりと受け取った』と伝えます」

「ああ、俺も、黒ちゃんの依頼を忠実に行うだけだからね」

「赤」—14

今回は何もしてやらなかったけど、弁護士として、これで良いのだろうか？

いくら、国選弁護人と言っても…。

いくら、被告人が罪を認めているとしても…。

○「白」—15

分かった！

胸の前で親指を立てて合図を送ったら、孫娘は小さく頷いた。

こんな偶然があっても良いのだろうか。まさか、あの時の男が、ここに居るとは！

それに、こんな偶然が重なるなんて…。

●「黒」— 15

もうすぐ、藤がお前のところに行くからな。

しっかりと、俺を無罪に導くんだぜ。

いくら下を向いて、俺と目を合わそうとしなかったって、バレバレなんだよ、バレバレ。

◎「赤」— 15

桃井さんも変わったな。

僕が高校入試の前日に、急に桃井さん一家が引っ越してしまった。窓から見てしまったあの時から、一ヶ月しか経っていなかった。

『やっぱり』と思った。

あれほど仲が良かったのに、彼女は、引越しの挨拶にも来てくれなかった。

○「白」―１６

よかった。

おじいちゃんが、分かってくれたようだよ。

●「黒」―１６

黒木とは、小学校の頃から暗号で文通していた。

今回も暗号で送って来やがった。それも、小学校で使っていた暗号じゃねえか。

色々考えて、これにしたんだろうな。

『犯人は、自首しそうもないんだ。逃げられると思っているみたいだ。りょうすけに、サガすように、言ってくれ。留守だろうがなんだろうが、俺の願いを、どうしても叶えて欲しい。絶対に頼む』

分かったよ。直ぐにな。

『犯人は、

自首しそうもないんだ。

逃げられると思っているみたいだ。

りょうすけに、

サガすように、

言ってくれ。

留守だろうがなんだろうが、

俺の願いを、

どうしえも叶えて欲しい。

絶対に頼む』

『は、じ、に、り、さ、い、る、お、ど、ぜ』

あいつも、凝ったことをするよな。これでも分かるのに、わざわざ「さが」をカタカナにしてくるんだから、まだ、余裕があるってことか。点々は解釈自由だから、

『は、じ、に、り、さ、が、い、る、お、ど、せ』

『端にリサがいる脅せ』

黒木、お前の伝言は、しっかりと受け取ったぜ！

俺に任せな。

◎「赤」―１６

「裁判長！」

「なんででしょうか？ 水沼さん」

「実は・・・」

「なんでも言ってください。この事件は、本人も主人を殺してしまったことを認めています。後は、量刑をどうするかの問題だと思っていますが・・・」

「じ、実は、私は被告人の赤峰さんを知っているのです」

「えっ、いつ頃のことですか？」

「思心がついた頃から、彼女が高校二年までです」

「それなら、あなたが裁判員でいることは問題ないですよ」

「そうかも知れませんが、桃井、いえ赤峰さんの心の傷に、ひょっとすると関係しているのではないかと思うことを知っているからです。

ここの皆さんは、公(おおやけ)に公表されたこと意外は、守秘義務があるので、話した方が良いのではないかと思って……」

「不必要に、赤峰さんの過去を知る必要はないのかも知れませんが、でも、裁判をする上で、どんなことでも知っておいた方が良いでしょう。皆さん、どうしますか？」

「あのお～、裁判長様」

「はい、茶岡さん」

「どんな話なのかは分かりませんが、私達が、赤峰さんのことは、どんなことでも知っているべきだと思うのですよ。警察や弁護士さんが知らない情報でも知る権利は、我々にはあると思います」

「それでは、皆さんの多数決としましょう。裁判官三名と、水沼さんを除く裁判員の六名で決めましょう。では、話しを聞くべきだ、と思う人は手を挙げていただけますか？」

裁判官の一人を除く八人の手が挙がった。

「それでは、水沼さん、話してください」

「栗田、あっ、すみません。赤峰さんの旧姓が、栗田さんなもので、つい栗田さんと呼んでしまいました。

僕が高校三年、赤峰さんが高校二年の時です。

僕は、大学の受験勉強をしていたので、毎日、遅くまで起きていました。いつものように空気の入替えのために窓を開けようと思い、カーテンを開くと、隣の赤峰さんが自分の家の玄関前にたたずんでいました。

どうしたんだろう？　と思いました。彼女は何故か一生懸命に、制服を引っ張ったりしていました。そして、玄関のドアを開けて入って行きました。

家に入ったのを確認してから、窓を開けました。

赤峰さんのお母さんが、『今まで、何を』という言葉が聞えてきましたが、次の言葉が止まってしまったようでした。そして、お父さんが、『風呂に入って来い』と声を殺して話したように聞えました。

僕は、『レイプ？』と思いました。

先ほども言いましたが、今回の事件には、なんの関係もないかも知れませんが……」

「そんなことがあったのですか。

至急、調べてもらいます。

良く話してくれましたね」

「裁判長様！」

「なんでしょう、茶岡さん」

「水沼さんにちょっと、聞きたいのですが、良いでしょうか？」

「水沼さん、良いですか？」

「なんでしょうか？」

「あんた、赤峰さんが、初恋の人じゃないかね？」

「…ええ、そうです」

「ありがとう、水沼さん。

話すべきかどうか、迷ったでしょう。

でも、あなたは、この事件も、その時のことを引きずっているのではないかと思ったのではないですか？」

「裁判長！」

「なんですか？ 水沼さん」

「…裁判員を辞退したいのですが…」

「何故ですか？」

「私の気持ちが、この裁判を変えてしまうかも知れないからです。

僕は…、僕は…」

「裁判長様」

「はい、茶岡さん」

「私は、彼をこの裁判から外してあげるべきだと思うのです。

これ以上、彼をとどめるのは、裁判員裁判の虐(いじ)めだと思うのですが、皆さん、どう思いますか？」

皆が、大きく頷いた。

「分かりました」

と言って、二人の裁判官を見た。

二人の裁判官も頷いた。

「それでは、辞退を認めます」

「皆様、短い間でしたが、ありがとうございました」

「それでは、急ではありますが、補充員から繰り上げますが、それで良いですね？」

全員が、また、力強く頷いた。

○「白」— 17

「見つけたよ」

「あ、ありがとうございます」

「礼を言われると…、困るんだが…」

「ど、どうしてですか？ 探し出してくれたのでしょうか？」

「ああ。

でも、残念ながら男の人は、君を知らないと言うんだ」

「そ、そうかも知れませんが…」

つ、連れの女の人も知らないと言うのですか？」

「その女の人にも会って来たよ。

残念ながら、知らないの一点張りなんだよ。

他に、何か覚えていないのか？ なんでも良いから、思い出したてくれ」

「す、すみません。一人にしてくれますか……」

「えっ、ああ、分かったよ」

何故、彼女は知らないと言ったのだろう。

僕を見て、微笑んでくれたのに。あれは、僕へではなかったのだろうか。後ろを振り返ると、老夫婦だったのに……。

女の方は覚えているのに、隣にいた男の方は、まったく覚えていない。

今になってみれば、どうでも良いことだが、なんで飴の包み紙拾ったのかを思い出した。

その女の方の服と同じ柄の包み紙だったことを……。

●「黒」 — 17

「私の助手が、藤沢さんに会って、話して来ましたよ」

「ありがとうよ。

藤は、なんって言ってた？」

「『しっかりと受け取った』と言っていたそうです」

「そうか、そうか。

やっぱ、達だよな。俺の気持ちを分かってくれたんだ。

ありがてえな、達ってよ。

弁護士さんには、迷惑を掛けちゃうが、よろしく頼むよ」

頭を下げた途端に、顔はニヤケ、舌が出ていた。

でも、両目に唾(つば)つけ、目の両端に、涙を作ることは忘れなかった。

◎「赤」―１７

「裁判員の皆さん。

赤峰さんのレイプ事件については、調べがつかしました。

ここで、お話しすることは出来ませんが、明日の公判で、検察官から話しが出ると思いますので、それを聞いて判断材料にしてください」

◇

「お帰りなさい。お疲れ様でした。明日も裁判ね。ご苦労様。でも、今日は早かったわね」

「実は、裁判員を辞退して来た」

「あらあら、また、どうして？」

「お前に話して、意見を聞きたいんだが、守秘義務があって話せないんだ」

「そうね。しゃべっちゃいけないわよ。しゃべったら、今度は、貴方が捕まってしまうわね」

「ありがとう、分かってくれるか？」

「分からない！」

「無理言うなよ。いくら夫婦だって、話せないんだよ」

「そうか。じゃあ、離婚しましょうか？」

「ば、馬鹿！ 結婚してなくても同じだ！」

「あら、そう。じゃあ、離婚はやめとくね。

…そうか、貴方が起きていて、私にしゃべったら、守秘義務違反になるのよね」

「そうだよ。そう決まっているんだよ」

「でも、貴方が寝ちゃったら…？」

寝ましょう、寝ましょう。お疲れ様でした。

布団は、いつでも寝られるように敷いてありますよ。

私が添い寝して、あ・げ・る」

「お、お前、何を言っているんだ？」

「良いから、良いから。

着替えて、着替えて。はい、パジャマ。

お風呂は、後で目が覚めた時に入りましょうね」

「わ、分かった。分かったから、手荒に扱うな。

お前って奴は、何を考えているか分からなくなる時がある。

ひ、引っ張るなよ。分かったって言っているだろうが。

で、でも、歯だけは磨かせてくれ。頼むよ。

…何、首を振っているんだ。歯も磨かずに寝ろって言うのか？

む、虫歯になっても、知らんぞ！

…な、何！ 痛いのは貴方だけだって？

そ、それはないだろう。

…い、いつまで起きてんだって？ ふくれつつらすることないだろうが。

わ、分かったから、添い寝してくれ。

さあ、横になったぞ！」

パチッ

「痛てえ。手を引っ叩くことないだろうが。

単身赴任で久しぶりなんだから…。

何、また首振ってんだ」

「さあ、布団の中に手を入れて…。

そうそう。良い子ね。

そして、目を瞑(つぶ)って。

本当に、良い子ね。

もう、貴方は寝ました」

「まだ、寝てないよ」

「馬鹿！

貴方は、寝たのよ。

さあ、鼾(いびき)をかいて！」

「グ、グッ、グー」

「良い子ね。貴方は、寝ました。

さて、これから、貴方は寝言(ねごと)を言います。

さあ、寝言を言いなさい」

「な、なにを…？」

…そ、そうか、そう言うことか」

「その言葉も、寝言ですね」

「あ、ああ、そうだ。寝言だ、寝言」

「無駄な寝言は言わないの」

「それでは、寝言を話すぞ！」

「馬〜鹿」

そして、裁判所であったことをすべて話した。でも、初恋の人だったとは言わなかった。

「そう。貴方の初恋の人なのね」

「い、いや…」

「別に、ヤキモチで言っている訳じゃないのよ。

貴方が、可愛そうだって思っただけ。

そして、その彼女も」

「ああ。

僕は、話して良かったのかな？」

「貴方は、正しかった。

だから、他の裁判員の人も賛成した。

そうじゃない？」

「お前に話せて良かったよ」

「ありがとう。」

ところで、この事件だけど、貴方が言うように、何か変ね」

「お、お前も、そう思うか？」

「ええ。余りにも出来過ぎてる」

「そ、そうなんだ。何か変なんだ。それが分からなくて……」

「ご苦労様でした。良く寝たでしょう？ さあ、起きて。」

ところで、どうするお風呂？」

「後で入る」

「なんの後？ 歯を磨いてから？」

「馬鹿！」

「あっ、胸に組んでいた手が出て来た」

「眠りから覚めたんだよ。」

お前も、添い寝は終わりだ！」

◇

「おはよう。もう起きていたのか」

「おはよう。そうよ、これが貴方の今日の予定表」

「予定表？」

「一週間は、休めるのでしょうか？」

「そうだが、もう、裁判員じゃないし……」

「会社には、ばれないわよ」

「そうかなあ？」

「会社で何か言われたら、守秘義務で話せないって言えば良いじゃないの」

「それもそうか。」

じゃあ、昨夜の続きを……」

パチン

「痛てて、なんだよ。手を引っ叩くことないだろう」

「さて、まずは、変装してね」

「な、なんだこれ？」

「おじいちゃんの形見よ」

「いやに古臭いと思った。」

でも、こんなのを着させて、僕を何処へ行かせたいんだ？」

「裁判所！」

「裁判所？」

「そう、貴方の初恋のサ・イ・バ・ン」

「ええっ？」

「続きを聞かなきゃ、分からないじゃないの。」

きっと、今日の裁判で、貴方の初恋の人がレイプされたことを、検察官が質問するはずよ。

それを聞いて、貴方の初恋の人が、どう反応するかを知りたいの」

「わ、分かったが、その『初恋の人』って言うのは、やめて欲しいんだけど。『赤峰さん』って言うてくれないかなあ」

「分かったわ。ごめんなさい。

やっぱり、ちょっと、嫉妬(しつと)していたのかも…」

「ところで、この顔じゃ、すぐばれちゃうぞ」

「私は、だあれ？」

「僕の奥さん」

「それは、そうだけど、職業は？」

「それは、君と出会えたのも、お袋が、君の美容院に通(かよ)っていて、僕より先に、お袋が君を好きになり、お袋の紹介で、君と会えて結婚した」

「昔のことは、この際、関係ないの。

私は、美容院に来る人のお化粧もするのよ。分かるでしょう？ 私に任(まか)せて」

「こ、ここまで来たら、死んだ気になって、自由に僕の顔を変えてくれ！」

「その覚悟、気に入った！

うふふっ」

「な、なんだ、そ、その、う、嬉しそうな顔は…」

「私の理想のおじいちゃんに、し・て・あ・げ・る」

○「白」―18

「あなたは映画館の半券を捨ててしまったと言いますが、あれほどの領収書を取って置きながら、何故、映画の半券だけがないのですか？」

「そ、それは、・・・自分でも、何処に捨ててしまったのか・・・、覚えていません」

映画館で見た女の人の服と一緒に包み紙を拾って、映画の半券と一緒に捨ててしまったと言ったら、余計に話しがややこしくなってしまう。でも、何か話さなければ。

「何故、領収書を集めるようになったかと言うと、前に、レイプ事件の犯人にされて、それからなんでも取って置いたのですが・・・」

と言った時に、弁護士が頭を抱えてうつむいた。

そうだ、レイプ事件の話しをしてはいけなかったんだ。

検察官も、警察の失敗を公(おおやけ)にしたくないために、弁護士と相談して、この件は出さないことにしていたのだ。

裁判官も、苦虫を噛んだような顔をした。

裁判長は、啞然(あぜん)としていた。

●「黒」―18

「あなたは、サイフを落としたと言いましたね。

でも、交番では受理されていないようですが、本当に交番に届けましたか？」

「俺、ちゃんと届けた。落とし物の紙を渡されて、それに、ちゃんと書いたよ、俺」

「検察官、ちゃんと調べたのでしょうか？」

「ええ、調べましたよ。でも、受理されていませんでした」

「どうも受理されていないようですね。

遺失物として届け出ていれば、自分で届け出を取り下げないかぎり、残っていると思うのですが？」

「取り下げなんか、しちゃいねえ！」

◎「赤」―18

「あなたは、高校二年生の時にレイプに遭いましたね」

赤峰さんは、うなだれるだけだった。

「調べてみました。

そして、ご主人がレイプ犯ではないかと言う可能性が出てきました。しかし、レイプの届け出もされていませんし、ご主人も亡くなっているので、それ以上の調べは出来ませんでした。

あなたは、ご主人がレイプ犯だと知っていたのではありませんか？

近所の人証言でも、最近のあなたの言動がおかしかった、と言っているのですが・・・」

赤峰さんは、唇を噛んでいたように見えた。

ま、まさか、ご主人がレイプ犯なんて、嘘だろう。

桃井、いや、赤峰さんの過去なんて、話さなかった方が良かった、と思った時に、そっと紙を引き寄せ、書き始めた。

ゆっくりと、ゆっくりと、考え、考え、書いていた。

顔を上げ、裁判長に向かって頷いた。

「それでは、読んでください」と、裁判長が言った。

裁判費用を軽減するためか、裁判員の補充員の女性が、赤峰さんが書いた物を読み上げた。

『すみません。

隠すつもりはなかったのですが、主人が、私をレイプした男だということを知っていました。

ある日、主人が電話していた時に、電話の相手の人、誰なのか分かりませんが、その人に

「ああ、俺の女房は、あん時の女だよ。

…なんで結婚したかって？

スリルだよ、スリル。毎日が、スリルの連続だよ。いつ、女房が気がつくかってね。

…ああ、当たり前だろうが、女房一回、浮気六回で、一週間が終わっているよ」

と言う会話を聞いてしまいました。

あの時、手に刃物を持っていれば、その場で殺していたかも知れません。

それからは、毎日が地獄でした。

まさか、あの日にかぎって、なんで会社を早退したか知りません。

なんで、あんなに暴力的になったのかも分かりません。

でも、あの時、主人に殺されるのではないかと思ったのは、前にお話しした通りです。

殺意がなかったかと聞かれても…、分かりません。

でも、あの時は、殺される、と思いました。

今でも、あの夫の、鬼のような顔を思い出すと、夜も寝られません』

○「白」—19

私は電気屋だ。

昔は、電器の故障があれば、皆、私を頼って来てくれた。

テレビや、電気洗濯機が家庭に行き渡った時が、電気屋の頂点だったのかも知れない。

あの時代の人達は、電気でテレビや洗濯機が動くことも分かっていた。

まともに学校へ行っていない私だって同じようなものだが、なんとか電気屋を続けることが出来た。

あっという間に、直すよりも買い換えた方が安い時代を迎えてしまった。電気屋で買うよりも安い店が、そこら中に出来てしまった。

妻を早くにガンで亡くし、息子を一人で育てた。そして、嫁を迎え、ユリが生まれ、すくすくと育っていった。そろそろ、私も現役を退(しりぞ)く時だと考えていた。

そんな時だった。

高校二年になったユリが、遅くなって帰って来た。

私は、嫁や息子の声を聞いて、ユリを迎えに出ることができなかった。

そして一ヵ月後には、ユリのために引っ越すことにした。

引っ越してすぐだった。ユリの両親が事故に遭い、ユリと二人の生活になってしまった。

最悪な時代だったのにも関わらず…。

金のために、盗みを覚えてしまった。

でも誰も、私が盗人(ぬすっと)だとは思っていなかった。

盗める人間は、私しかいないのに、警察さえも、私は透明人間扱いだった。

まあ、私が盗む金額は、本人の勘違い程度の額なので、警察に届けない場合が多かった。その家庭、家庭で、盗む金額も違っていた。貧乏人からは、ちょっとだけ。金持ちからは、ちょっと多めに。それで、孫娘を育て上げた。

今は、アナログテレビがデジタルテレビになると言うことで、この年になっても仕事がある。

そして、あの日も電気がついていなかった、あの家に盗みに入った。

物色している時に、後ろに青山さんが立っていた。

まさか、九時なのに、電気を消して横になっているとは思わなかった。

「何やってんだ、お前」

「わ、私は、電気屋で、こ、ここら辺のテレビのデジタル化の工事をやっているんですよ」

「それで、なんで俺の家の中に居るんだ。」

俺は、頼んでないぞ。それに、俺の家は有線だ！

家の電気だって消えていただろう」

「その有線会社から、配線の確認を今日中になって、頼まれたんですよ。

電気はついていましたよ。ベランダのドアも開いていたので、入って声も掛けました」

「そうか。分かった。

ちょっと、そのまま待っていてくれ。有線会社に確認の電話をしてみるから…」

「すみませんが、水をいただけますか？」

「ああ、そっちが台所だから。コップは、透明なガラスのやつを使ってくれよ！」

私は捕まると思った。

台所に行って、そっと包丁を取り出し、電話しようとする老人の肩を叩いた。

振り返りざま、刺した。

あっけなかった。

殺してしまった。

盗人ではなく、殺人者として逮捕されてしまう、と思った。

その時、後ろのポケットに仕舞ってあったサイフを取り出し、そっと置いた。

まさか、このサイフが役に立つとは…。

電柱の上で作業をしている時に、ゴミ捨て場に、サイフを見つけた。

電柱から降り、サイフを手にした。

しかし、何も入っていなかった。いや、一枚の名刺だけが入っていた。

ゴミ捨て場に戻そうとした時に、ゴミを捨てに来るお婆さんが近付いて来たので、あわてて後ろのポケットに仕舞い、近くの電柱によじ登った。

そのサイフが、あいつのサイフだったとは…。

盗んだ物は、まだ、ここにある。

昔、流行(はや)った純金のカマボコ指輪は、印鑑になっていた。だが、金メッキだった。
これを隠そう。そして、密告電話をしよう。

●「黒」―１９

裁判を見に行った。

黒木は、すぐに俺に気がつき、目でユリを指した。

俺は、胸の前で親指を立てた。

裁判の途中で抜け出し、裁判所が見える喫茶店でタバコを吸いながら、ユリが出てくるのを待った。

夕暮れになって、ユリが出て来た。

あわてて会計を済まし、後を着けた。

誰も、ユリを監視していないのを確認して近づき、肩を叩いて、

「桜井さん、ユリさんですよ？」

ビクッと肩を震わせ、振り向いた。

その目は、怯(おび)えていた。

俺は、ジャンパーの内ポケットから一枚の写真を取り出し、ユリに見せた。

彼女は、写真をひったくった。

「そんな物は、いくらでもあるぜ。

時間は取らせねえから、ちょっとつき合ってくれよ。

安心しろ、そこの茶店に行くだけだ。

着いて来な。

分かっているだろうが、逃げるような馬鹿なことはすんなよな」

と言うと、素直(すなお)に頷いた。

喫茶店に入り、あいていた奥に座った。

コーヒーを頼み、ウェーターがコーヒーを持って来た後で、胸ポケットから数枚の写真を取り出して、テーブルに並べた。

ユリは、あわてて掻(か)き集めた。

「まだあるぜ！ 何枚でも現像出来るからな」

「な、何故？」

「お前に、ネガを返してやろうと思ってな」

「お、お願い、か、返して」

「ただし、条件がある」

「な、何を・・・？」

「簡単なことさ。黒木を無罪にしろ！」

「む、無理です。は、判決は、わ、私が決められないわ」

「そんなことは分かっているよ。

昔から、お前は頭が良かったよな。だから、やって欲しいのは・・・」

彼女は、冷静だった。

知られたくない過去を暴(あば)かれたのに……。

まるで、あの時のレイプ事件が分かっても良いんだ、いや、ひょっとすると、僕が裁判員にいたことも分かっていたのかも知れない。

結局、僕が話さず、あのまま裁判が進んでいたら、正当防衛で無罪になっていただろう。

それが、殺意を持っていたかも知れないとなれば、有期刑になるかも知れないのに、平然としていた。

何故？

これは、裁判で知りえた情報だから、『守秘義務』なんて関係ないな。妻に、話せる！

さあ、家に帰って、この話しをしなきゃ。

○「白」—20

「あ、あの……」

「どうしましたか？」

「今、白石さんの裁判をやっていますよね」

「ちょっと待ってください……。」

白石一郎さんの裁判でしょうか？」

「え、ええ、その裁判です」

「白石さんの裁判で何か？」

「じ、実は、私……私、白石さんが、夜中に近所の公園に、何か埋めているのを見たんですよ」

「何故、今頃になって話しているのですか？」

「白石さんが、殺人事件で裁判になっているのを、昨日、知ったんです。そして、白石さんが公園で何か埋めているのを思い出したんです。酒が好きで、その時も酔っ払っていたもので、忘れていました」

「あなたのお名前は？」

「そ、それだけは勘弁してください。すみません」

と言って、110番との通話は切れた。

電話は、公衆電話からであった。

すぐに公園が調べられ、すぐに掘り返した後が見つかり、そこから『青山』と彫(ほら)われた指輪が見つかった。

●「黒」—20

「奴。失礼、黒木さんは、緑川さんを殺していますよ。」

だって、あの人の素行を聴いたでしょう。クズですよ、ク、ズ。フ、リョ、ウ」

「あの……。」

その言い方はないんじゃないですか！

私は、黒木さんの弁護をする訳じゃないですが、私も高校までは不良と呼ばれていました。そ

れでも、今は、裁判員に選ばれています」

裁判長が、

「桜井さんの言う通りです。

人を見た目や過去で判断してはいけません。

背広を着ていないから。仕事をしていないから、と言ったことだけで犯罪者扱いしてはいけません。

事実に基(もと)づいたことだけで審議しましょう」

「すみませんでした。言い過ぎたことをお詫びします。

それでは、何故、黒木さんは、交番にサイフを落としたと言っているのに、受理されていないかったのでしょうか？」

「あのお・・・。

黒木さんの言っていることが正しい、と言う前提に立ってみませんか？

何故、黒木さんが交番に遺失物として届け出た用紙が、どこへ消えてしまったのでしょうか？」

「それは、奴、失礼、黒木さんが嘘をついたんじゃないですか？」

「そうかも知れません。

でも、私・・・、考えてみました。

何故、用紙を提出したのに、受理されなかったのか？

理由は、分かりませんが、受理された後で、取り消されたのではないのでしょうか？

だから、受理された物の中になかった。

そうしたら、残るのは、不受理の中じゃないのでしょうか？

裁判長さん。不受理の中を調べたか、確認していただけますか？

そこになかったとすれば、黒木さんが嘘をついたということになり、有罪は確定すると思うのですが・・・。

もし、見つかったとすれば、警察の不法逮捕、ということになりませんか？」

「桜井さん。

あなたの言う通りです。検事さんに聞いてみましょう。

調べたかどうかも含め、確認してもらいますので、このまま、少しだけ待っていてください」

◎「赤」—20

「お帰り〜っ。どうだった、裁判？」

「君の言った通りだった。検察官が、レイプされたことを話したよ」

「彼女は、事実を認めた！」

「な、なんで知ってんだよ。君も変装して傍聴していたのか？」

「まさか。

本当は、貴方が言うように、私が傍聴したかったわ。

でも、貴方の裁判なのだから、貴方が最後まで見届ける必要があると思ったの。

貴方の初恋のためにも。

ご、ごめん。でも、ヤキモチじゃないわよ。

いや、ヤキモチかな。

貴方が傍聴している間に、ちょっとだけ調べてみたの。

さて、次の行動は、分かっているわね。

ついでに、この情報も含めてね」

と言って、彼女は話し出した。

「け、警察でも調べられなかったのに、良くそんなことまで分かったな」

「殺されてしまった赤峰さんの義理の妹、と言うことで聞き回ってみたの。そしたら、警察じゃないものだから、色々と話してくれたわ。みんな、警察と関わりたくないのよ。それに、その人、そんなに悪い人じゃないみたいよ。

もちろん、善人かは、分からないけどね」

「そうかもな。

でも、そんなことをして良いのか？

どうも、君が行おうとしていることが理解できないんだけど……」

「私だって、これが正しいなんて分からないわ。

でも、疑問を残したままでいたら、いやじゃない。

死ぬまで、私達は生きているのだから、楽しく生きなきゃ。

そのためには、後悔をしたくないものね」

「ありがとう。僕の初恋の彼女が、これから正しく生きていくためにも、そうだよな」

「もう、いやな言い方ね。『赤峰さん』でしょう、赤峰さん」

「いや、旧姓は、桃井さん」

「あ～あ、やってらんないわ」

「それじゃあ、そろそろ行って来るよ」

「結果を、気にしちゃだめよ」

「ああ、分かった」

「その前に、その顔で行くの？

化粧を落とさなきゃ。すてきな、お・じ・い・さん」

○「白」―2 1

刑事らしい男が入って来て、検察官にメモを渡している。

なんだか知らないが、不安になった。

僕は、殺していないのに、少しずつ、少しずつ、泥沼にはまり込んで行くような、もがけば、もがくほど、沈んでいくような、そんな気持ちになっていた。

「裁判長！」

「どうしましたか、検察官」

「今、届けられたのですが、証拠となるものが見つかったようです」

裁判官同士で話し合い、

「それでは、どんな証拠なのか、話していただけますか？」

「まだ、調査中ですが、良いでしょうか？」

裁判官同士で、また話し合った。

「裁判員裁判は、始まったばかりです。短期間で裁判を行うために、新たに判明した事実は、聞きたいと思います。

裁判員の皆さん。今、お聞きしたように、裁判員裁判は、始まったばかりで、何が良くて、何が悪いのか模索中です。

検事さんが話したように、確(かく)たる証拠ではなく、調査中の証拠であることを念頭におき、お聞きください。

それでは、検察官、お願いいたします」

「それでは、

青木さんのものと思われる、名前が刻印された指輪が見つかりました。

発見された場所は、被告人の白石さんの家から、数mしか離れていない公園でした。

その場所を知らせてくれ、埋めていたのは、白石さんだと言う電話があったのです。連絡してくれた男の人は、公衆電話からだったので、誰が電話したか分かっていません。

そのため、被告人の白石さんが、本当に埋めたかどうか、今、調べています」

「まずは、その証拠品が、青山さんの物であるかどうか、確認してください。

そして、知らせてきた男の人を割り出してください。

それでは、三十分の休廷を取ります」

●「黒」―2 1

「お待たせしました。確認して来ました。

桜井さんが言ったように、受理したものしか調べていなかったようです。そして、受理されなかった物も含め、すべて調べてもらいました。

届け出されていました。

ちょっと話しが長くなりますが・・・、

黒木弘さんが交番に届け出た後で、紅呂木弘史さん。『くろ』は、口紅の紅(べに)、『くれない

』ですね。それにお風呂の呂と、被告人と同じ「木」で、『くろき』と読むそうです。本名は、被告人と同じ『黒』い、『木』なのですが、小説家を目指している彼は、まったく売れなくて、友人の勧めで占い師に占ってもらったところ、黒木の『黒』が暗くしていると言われ、紅(べに)の『紅呂木』に変えるように言われ、改名しました。それからは、名刺からサインから、すべて紅(べに)の『紅呂木』にしてしまいました。交番に届け出た名前も…。『ひろし』は、被告人と同じ『弘』に歴史の『史』が付いていました。その、紅(べに)の『紅呂木』さん、…言いづらいので、紅(くれない)さんにしますね。その紅さんも長サイフを落として、その交番に届けたそうです。時間的には、被告人が届けてから三十分後でした。交番に届けた後で、飲み屋から、サイフが見つかったと電話があった、と言っていました。紅さんも、交番に戻って話せば良かったのですが、酔っていて面倒なので110番をして、『サイフが見つかった』と言っていました。電話に出た担当者が、名前を確認したのですが、『くろき ひろし』さんですね、と確認しただけだったので、次に表示された『紅呂木』の『紅』の漢字を見て、『くろき』とは関係ないと思ってしまいました。まさか、同じ『くろき』さんが登録されているとは思ってもいなかった、と言っていました。今まで、届け出を取り消す人なんか、あまりいないそうです。

偶然が重なってしまったのですね。そして、遺失物の担当者は、被告人の『黒木弘』の『受理』を取り消してしまった。そのために、『受理』された中に被告人の『黒木弘』さんが消えてしまった、ということです。分かりましたか？

これで、サイフは証拠としては認められません。

でも警察が怠慢だとは思わないでくださいね。警察も、交番に確認したのです。でも、『受理』されたものしか聞きませんでした。それは、サイフが緑川さんの家の中で見つかった、という気持ちがあったからだと思います。

このことで、同姓同名の人が、世の中にはたくさんいることが分かったと思います。

冤罪が少しでもなくなるように、伝えておきました」

．．．．．

どうして、どうしてなの？

私は、あの藤沢に脅されて、黒木を無罪にするようにした。

でも、私の意見だけで、裁判は決まってしまうの？

違うでしょう？

何をやっているの。貴方達は、警官でしょう！

喫茶店で藤沢は、私に言った、

「誰かが、何かを言ったら、自分のやってきたことを思い出して弁護すりゃぁ良いんだよ。簡単だろうが。自分の昔を思い出しゃぁな。

あん時から、悪知恵だけは、抜群だったからな、お前は」

と言われて、私は生まれ変われないんだと思った。

で、でも、私の意見でこんなことになるなんて…。

どうして妻が検事さんではなく、弁護士さんに話を聞いてもらうように言ったのか分からなかった。

でも、妻を信じることにし、赤峰さんの弁護士さんに会いに行った。

「私が、弁護士の黄(こう)です」

「実は、今回の赤峰さんの事件について、お話しがあって来ました」

「どこかで、お会いしましたね」

「ええ、初日だけ、裁判員として裁判官と一緒にいました」

「そうですか、お会いしたことがあるはずだ。

でも、なんで裁判員を下りたのですか？」

「それも含めてお話しします」

「どんなことでしょうか？」

でも私は、赤峰さんを守るためにいることを忘れないでください」

「私も、分かっています。そうでなければ、私が事件に巻き込まれた時に、守ってくれる人がいなくなってしまうです。

でも、裁判を行う以上、事実は正しくなければならぬと思うのです」

「私ではなく、警察か検事さんにお話しした方が良いのではないですか？」

「実は、私も検事さんに話すべきだと思うのですが、妻が、弁護士さんに相談するようにと言うもので…。

それに、『疑問を持ったままで生きるのは苦しい。楽しく生きなきゃ』と言われて…」

「ひょっとして、奥さんの名前は、水沼カナさんではありませんか？」

「ええ、妻を知っているんですか？」

「失礼ですが、あなたは、ご養子ですか？」

「ええ。私は、六男なもので、家を継ぐ必要もなかったし、水沼さんに、どうしても名前を継いで欲しいって言われ、親父も反対しなかったの。それに、僕の会社も、名前にこだわるような会社じゃなかったし」

「そうですか。

それでは、貴方達夫婦の結論を、聞かせてください！」

「私達ではなく、妻の出した結論ですが…」

と言って、高校時代の話や、妻が集めた情報を、弁護士さんに話した。

「ところで、妻と弁護士さんの関係を教えてくださいませんか？」

「はい。

奥さんのお父さんの顧問弁護士をしていたのが、私の亡くなった父なのです。二人は、仕事を越えた親友でした。水沼さんの会社は順調に成長していたのですが、役員の一人が不正を働き、そこからは、坂道を転げるように、会社は倒産の道を進んで行きました。

父も頑張っていたのを覚えています。

従業員を解雇しなければならなくなった時に、水沼さんのお父さんは、自殺を考えたそうです。

その時に、まだ小さかったカナさんが、

『お金なんて、なんとかなると思うの。楽しく生きなきゃ』と言ったそうです。それで自殺をやめ、すべてを整理して、従業員の退職金を作ったそうです。

強いお嬢さんですよ」

「そうだったのですか。そんなことは何も言っていませんでした」

○「白」―22

「白石さんは、絶対に無罪ですよ！

犯人が、白石さんに罪を着せるために、新しい証拠を密告したのですよ！」

「こんなタイミングで、証拠が出るなんておかしいですよ。

今まで白石が、いえ、白石さんが、殺人犯だと思っていました。でも、話を聞いていて、気がついたんです。

古いサイフを捨てる時に、『ありがとう』、なんて言う人、いませんよね。

でも、私も、愛着があって捨てられない物が山ほど増えてしまったんですよ。そんな時に子供が生まれ、子供の服が増えちゃって、泣く泣く捨てたことがあるんですよ。

私も、捨てる時に『ありがとう』って言って捨てたんです。

私は、無罪かどうか、今は分かりませんが、白石さんの話していることが、やっと、自分に重なって来ました」

う、嘘でしょう？

な、なんで、新しい証拠が見つかったのに、そんなことを言い出すのよ！

「裁判長！」

「なんででしょうか、灰野さん？」

「裁判って良く分からないのですが、動機があって、アリバイがなくって、証拠があったら、有罪じゃないのですか？」

「一般的には、その通りだと思います」

「それでは、今回は有罪ですよ？」

「ええ、灰野さんがおっしゃるように、有罪になっても問題がないような事件だと思います。

でも、それは私達裁判官三名と、灰野さん達、裁判員六名で決めることです。

多数決と言ったら変ですが、それで無罪かどうかを決め、有罪と決まった段階で、刑期を決めることになります。

私も、裁判中に証拠が出てきたのは初めてです。それを、どう判断するのかは、私達なのです。

良いですか？」

「は、はい」

「みなさんも、どう判断するのかは、これからです。

でも安心してください。被告人が有罪になったとしても、判決に不服であれば上告できるのです。

もし、私達が有罪と下しても、本人が無罪を主張すれば、上告できるのです。

あなたが、被告人の人生を決めるのではなく、一般の人達が、その事件を見て、どう判断するのかを決めるのです。

上告されれば、その後は、私達、裁判官が決めるのです。

だから、みなさん、自分の気持ちに正直になってください。

そのための『裁判員裁判』だと、私は思います」

●「黒」— 22

「桜井さんの言う通りだったですね。

裁判所としては、偏見に惑(まど)わされなくて助かりました」

「わ、私は、ただ、自分の疑問を口にただけです。

でも、本当に、黒木さんが犯人ではないと言い切れるのでしょうか？」

「まだ、疑問があるのですか？」

「い、いいえ」

◎「赤」— 22

黄弁護士は、赤峰さんを接見室に呼び出した。

「赤峰さん、声は、まだ出ませんか？」

小さく頷いた。

「先ほど、看守に聞いたのですが、寝言をお話しするそうですね？」

小首を傾げた。

「私は医者ではないので、良く分かりませんが、夢の中では声が出ても、起きている時には、声が出ないこともあるのでしょうか。」

それは別として、あなたは、色々と注文をしているようですね。配達業者が良くあなたの家を訪(たず)ねて来ていると、もっぱらの噂になっているようですが、何をそんなに購入しているのですか？

それに不思議なことに、配達業者の車が家の前に止まっていないそうですね。ただ、配達人の服を着た人が、小荷物を持って、あなたを訪ねる。そして数時間は、その配達人はあなたの家から出てこない。

警察も、近所の人達に聞いたそうですが、警察には誰も話さなかったそうです。

あなたは、相当に近所の人の情報を持っているそうですね。

だから、近所の人達は警察に言えなかった。言えば、あなたが、何を言い出すか分からなかったからです。

違いますか？」

赤峰さんは、そばにいた警官に、紙とサインペンを借りて書き出した。

『あなたは、私の弁護士さんではないのですか？』

「そうです。あなたの弁護士です。

でも、ちゃんと事実を話してくれなければ、弁護のしようがないです。

正直に話していただけますか？

話していただければ、全力であなたの弁護をします！」

『帰ってください。お願いだから、帰ってください』

「分かりました。帰ります。帰りますが、本当にあなたは、それで良いのですか？

一生、その苦しみを抱えて生きて行くのですか？

良く考えてください。

それでは、失礼します」

○「白」—23

…そうか、そうなのよね。私が死刑と言って、それが通ったとしても、あの人は『上告』が出来るのよね。

私は…、何か…、勘違いしていたのかしら？

あのレイプ事件も、白石が犯人だったのかしら…？

私は、レイプ犯を見ていなかった。恐くて怖くて、顔など見られなかった。誰でも良かった。警官でも検事でも、誰でも良かった。

今度の事件も、白石を見た時に、こいつが犯人だと思った。

そして、おじいちゃんにサインを送った。

そしたら、新たな証拠が出て来た。

…ま、まさか…

●「黒」—23

「あれっ、桜井、桜井じゃないか？」

「あっ、あの時の検事さん」

「どうしたんだ、こんなところで？」

まさか、また捕まったか？」

「や、やめてください！」

「悪い冗談だったな。

でも、どうして裁判所に？」

「裁判員に選ばれて来たのです！」

「そうか。裁判員に選ばれたのか。

と、言うことは、今は更生しているってことだな」

「もちろんです！」

「何をむきになっているんだ。おかしいぞ」

「は、初めての裁判員なので…」

「変わっていないな、お前は」

「ええ、な、何が？」

「お前は、あん時から、素直(すなお)な女の子だった」

「ふ、ふざけんな！」

「久しぶりに、その台詞(せりふ)を聞いたよ」

「……」

「聞いてやろうか？」

「き、聞いてくれますか？」

◎「赤」— 23

私は、何を迷っているの？

あの時、私は決めたのよ！

弁護士は、私を無実にするのが仕事じゃない。なんで、私の罪を暴(あば)こうとするの？

何故？

このまま、何ごともなく裁判が進めば、有罪の判決を受けても、執行猶予がつく。私は、それで十分だった。正当防衛で、無罪になるなんて、恐かった。

○「白」―24

「裁判・・・長」

「どうしましたか、灰野さん？」

「あ、ええ・・・」

「灰野さん、顔色が悪いようですが、大丈夫ですか？」

「は、はい・・・」

「みなさん、申し訳ありませんが、少しだけ灰野さんと話しがしたいのですが、休憩して良いでしょうか？」

「ああ、俺は良いよ」

「じゃあ、みんな、休憩とするか」

他の人達が頷いた。

「それでは申し訳ありませんが、三十分ほど休憩とします」

.....

「私は、十年前にレイプされました。

レイプ犯を恨みました。

レイプ事件などなければ、今頃は・・・、彼と結婚して・・・、子供が生まれていたかも知れないのに・・・。

顔を見ていませんでした。

私は、誰でも良かったの。

警察に來られた時に、週刊誌が置いてあったの。

それを見て、『この人に似てる』って言ってしまった。

男だったら、誰でも良かったの！

そしたら、すぐに白石さんが捕まって、マジックミラー越しに、『この人よ、この人！』と、叫んでいた。

そして、その人の顔が目には焼きついてしまって・・・。

●「黒」―24

「じ、実は・・・」

リサは、昔お世話になった裁判官に、すべてを話した。

過去の罪を悔いながら・・・。

リサの目には、涙があふれていた。

◎「赤」―24

私は、どうすれば良いの？

あの弁護士さんが言ったように、このまま・・・あの人と・・・一緒に・・・知らん顔して・・・生きていける？

わ、私には出来ない。私には・・・

○「白」 — 25

「灰野さん、良く話してくれました。

辛(つら)かったですでしょう。

苦しかったですでしょう。

悲しかったですでしょう。

申し訳ありませんが、おじいさんを調べさせていただきます。

どうしますか？

裁判員として、続けられますか？」

灰野さんは、下を向いて、涙を流しながら小さく首を振った。

「分かりました。あなたは、ここにいてください。他の人達に確認してきます」

.....

「灰野さん、今日まで、ご苦労様でした。

全員一致で、あなたの裁判員は取り消されました。

あなたは、悪くありません。

皆、あなたに同情して泣いていました。

これで良いですね？」

小さく頷いた。

●「黒」 — 25

「リサ。良く話してくれたね。

辛(つら)かっただろう。

悔(くや)しかっただろう。

昔のように怒鳴りたかったろう。

もう、安心しろ。

担当の裁判長は、私の同期だ。

もう、裁判員席に座らなくても良いようにするから、少しだけ、ここで待っていて欲しい。それで良いな？」

リサは、小さく頷いた。

.....

「裁判長に言われて、皆の前で話して来たよ。

みんな、泣いていたよ。

それに、そんなに苦しい状況なのに、冷静な君の判断に感服していたよ。

ご苦労様。

これからも、何かあったら相談に来いよ。いいな」

リサは、私の目をじっと見つめて、大きく頷いた。

その目には、今にもこぼれそうな涙が光っていた。

◎「赤」―25

「だ、誰か居ませんか！

べ、弁護士さんと呼んでください！」

看守が来た。

「どうした。大声を出して」

「お、お願いします。弁護士さんを……」

「分かったよ、呼んで来るが、ちゃんと声が出るじゃねえか」

さくらは、恥ずかしそうに下を向いた。

「やっと、人間らしくなったな。」

今すぐに呼んでくるから、待ってなよ。

でも、良い声だよ、あんた」

……

「弁護士さん、聞いてください」

「はい」

「弁護士さんが思っているように、私は殺していません。

主人を殺したのは、配達業者に変装した彼でした。

じ、実は……」

「話したくなければ、話さなくて良いのですよ」

「い、いえ、その人は、私をレイプした人です。

すべてを忘れ、主人と結婚しました。

そんなある日、隣の紺谷さんのところに届け物がありました。紺谷さんの家が留守で、たまたま、庭の花壇の水撒きをしていた私に、配達していた人が話しかけて来ました。

そう、私をレイプした人でした。

自分では忘れようとしていたのに、忘れていなかったのです。

でも、その人も、すぐに気がつきました。

そのまま、家の中に入って来て……。

その人は、配達会社を辞めても、その服だけは持っていたようで、何度も、何度も、私の家に来ました。

最初のうちは、近所の目などは気にしていませんでしたが、段々と私に対する態度が、あのレイプされた時の近所の人達と同じようになって来ました。

私は、逃げられなくなりました。

そして私は、その人達の弱点を探しました。

探せばあるんですね。弱点なんて。

ゴミを出す日が決まっているのに、夜中になると、こそこそと捨てに来る人。

良い服を着ている金持ちを装(よそお)っているのに、隣町までパチンコに行く人。

なんでもないことなのに、その場を見られているので、みんなビクビクしていたわ。

痴呆症の義理のお母さんを、陰で虐めている人もいたわ。

それを、時々、他人事のように、本人の前で言うのよ。

ただそれだけで、十分だったわ。

私に対しては、何も言わなくなったわ。噂も出来なくなるくらいにね。

でも、主人にバレてしまったみたい。

あの日、会社を早退して帰って来てしまったのよ。

彼は、言い訳をしようとしたけど、まったく聞く耳がなかったの。

そして、彼が包丁を取り出して、主人を…。

その時に、隣の紺谷さんが来たのよ。

あわてたわ。

とっさに、私が殺したことにしたの。

紺谷さんは、彼がそばにいることも知らないで、私を介抱してくれたわ。

あの人、力強いのね。

包丁を取り上げられる時に、必死で握ったわ。

その間に、彼は逃げたわ。

そうそう、お巡りさんが、彼の長サイフを持って来た時には、目が点になっちゃった。

あわてて、『主人の物よ』と言ったけど、中身を確認されたら、ゲームセットだったわ。

それに、私をレイプしたのが主人だって言われた時には、もっとビックリしたわ。

だって、私をレイプしたのは、主人じゃなく、彼の方なのにね。

良く、あんな嘘が言えたのか、今でも分からないの。

いつの間にか、嘘に嘘を重ねていたら、自分が分からなくなってしまった……」

うなだれ、両手で顔を覆(おお)い、嗚咽(おえつ)がもれていた。

「もう、良いですよ。

良く話してくれましたね。

辛(つら)かったでしょうね。

心細かったでしょうね。

不安だったでしょうね。

あなたを裏切るような弁護士ですが、あなたの弁護を続けさせていただきますか？

お願いします」

「私こそ、やっと安心させてくれた弁護士さんを、解雇などしません。

ところで、知っていたら教えて欲しいのですが……」

「为什么呢？ 私が知っていることであれば……」

「最初に裁判員としていた人が、次の日から変わってしまったのですが、知っていましたか？

」

「ええ」

「その人、私の初恋の人にソックリだったんです。

あのレイプ事件があって、引越しなどしなければ……。

ゴメンなさい。そんなことはないですよ。

これから、どうしたら良いか分かりません。
よろしくお願いいたします」

完

あとがき

★あとがき

「おいお前、裁判を見たことがあるのか！」

「すみません。みたことはありません」

「検察官の起訴状を読み上げた後で、被告人に確認するじゃないか！」

「そ、そうなんですけど……」

「証人は、どうした！ 証人は！」

「か、書ききれなくて……」

小説と言うことで、許してください」

と言うことで、事実と異なる点がありますが、お楽しみいただけましたでしょうか？

ところで、この3つの物語の共通点は、見つかりましたか？

殺人、レイプ、……………

そうです、被告人と裁判員が知人だったんですね。

いや、そうではなく、登場人物の名前です。すべて「色」で統一してみました。

辛口のご批評をお待ちしております。

(湊 覚)